

平成 26 年 8 月 17 日 (日)

てらまちきゅういき ほうじょうじあと
寺町旧域・法成寺跡現地説明会資料

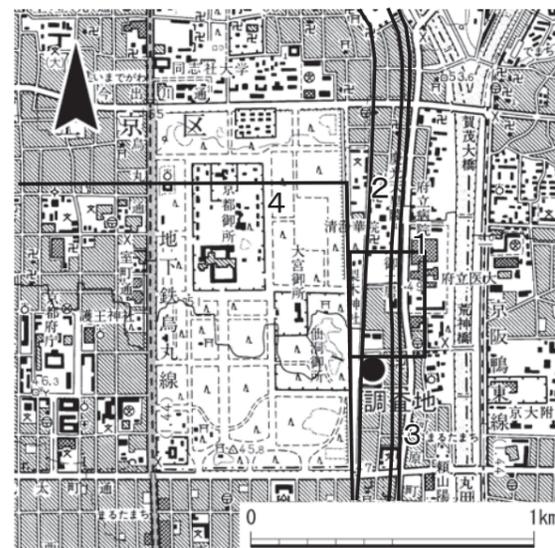
調査場所 京都市上京区寺町通荒神口下る松蔭町131他
 調査期間 平成26年6月9日～8月末(予定)

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
 〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3
 URL <http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

1. はじめに

調査地は、平安時代に藤原道長により創建された法成寺の境内に位置すると想定されています。また、天正年間(1573～1593年)に豊臣秀吉が京都市中にあった寺院を一括して移転させた寺町にあたります。埋蔵文化財包蔵地としては寺町旧域と呼称されています。

今回の発掘調査は京都府立鴨沂高等学校校舎等改築工事に先立って実施しています。南校地の敷地内で、北側に250㎡、南側に580㎡の調査区を設けて調査を実施しています。



第1図 調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 「京都東北部」)

1. 法成寺跡 2. 寺町旧域 3. 御土居 4. 平安京跡

2. 調査の概要

① 法成寺跡

法成寺は藤原道長が寛仁4(1020)年に創建した寺院で、史料からは最大で近衛大路末(現在の荒神口通付近)を南限に、西は東京極大路(現在の寺町通付近)、東は鴨川の南北3町(約360m)、東西2町(約240m)の寺域をもった藤原摂関家最大の寺院とされています。文献によると、池を中心に堂塔が配置されていたと考えられており、道長の子頼通が宇治の平等院を造る際に手本とした寺院として知られています。しかし、その実態についてはよくわかっていませんでした。

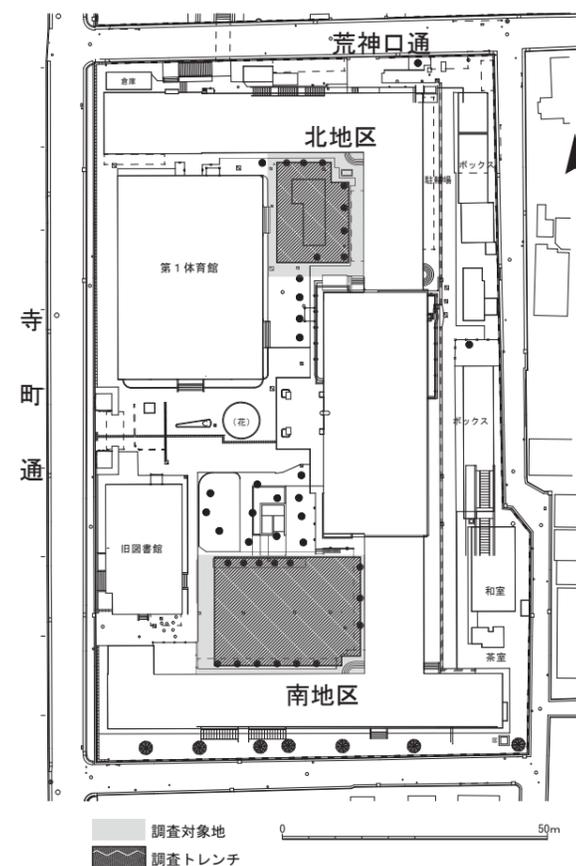
今回の調査とは別に、今年度、京都府教育委員会が鴨沂高校北校地内で実施した立会調査において、多くの瓦が出土する地層が現表土下約2.2mから3mの間に存在することが明らかとなりました。非常に狭い面積のため、瓦が含まれ

る地層の性格は分かりませんでした。出土量の多さから、法成寺の主要部分が荒神口通より北側に所在する可能性が考えられます。

今回の当センターの調査では、寺町の整地土より下に約1.8mにわたる砂礫の堆積が確認されました。この砂礫には、法成寺に用いられたとみられる緑釉瓦などが室町時代の土器とともに含まれていました。砂礫の堆積の観察より、鴨川の洪水に伴い、徐々に現在の地表面近くまで土砂が堆積したことがわかりました。このことから、平安時代には調査地周辺は鴨川の河川敷、もしくは河道であったと考えられます。

② 寺町旧域

秀吉は京都の都市改造を図り、天正19(1591)年に御土居と呼ばれる大規模な土塁と堀で京都を囲みました。寺町は京都市中にあった寺院を



第2図 鴨沂高校内調査地配置図

御土居の西側、鴨川西畔の鞍馬口から六条までの間に移転させたものです。史料では、100寺以上の寺院が寺町に配置されています。

今回の調査地は、「京都図屏風」(1621年成立)では会念寺や常念寺が、「洛中絵図」(1637年)では革堂や専念寺が記されています。宝永5(1708)年に禁裏やその他の御所、京都の大半を焼く大火があり、鴨沂高校周辺も広く火災にありました。この時、寺町にあった寺院は鴨川の東などに移築されています。以後、この地には武家屋敷が建ち並び、その後再び天明8(1788)年の大火で周辺は焼失しています。

今回の調査では、近現代の盛土1・2の下から焼土・炭を含む整地層を確認しました。出土遺物より、北地区の整地層は宝永5年の大火後の整地に伴うことがわかりました。さらにその下層で、天正の寺町整備に伴う整地層を検出しました。南地区では宝永の整地層のさらに上で天明8年の大火後の整地層を確認しました。

北地区では、宝永の整地層から掘り込まれた柱穴を検出しました。寺町期の整地層上面では、

幅約1.5m、深さ約0.7mの南北方向の溝SD28や土坑SX04を検出しました。溝は寺町の寺院に伴うと考えられますが、性格は不明です。土坑SX04には多量の焼けた瓦が投棄されており、宝永5年の火災で焼亡した建物の廃材をかたづけられた穴と考えられます。宝永の整地はこの直後に行われたとみられます。

南地区では北地区と同じく、宝永5年の火災に伴う整地層から掘り込まれた柱穴や溝を検出し、寺町期の整地層上面では南北2間、東西4間以上の礎石建物跡、寺町期の寺院に伴う多量の焼け瓦を廃棄した土坑SX26を検出しました。前者は宝永5年大火後の武家屋敷もしくは公家屋敷に伴う遺構、後者は寺町に伴う寺院の遺構である可能性が高いものと考えられます。

3. まとめ

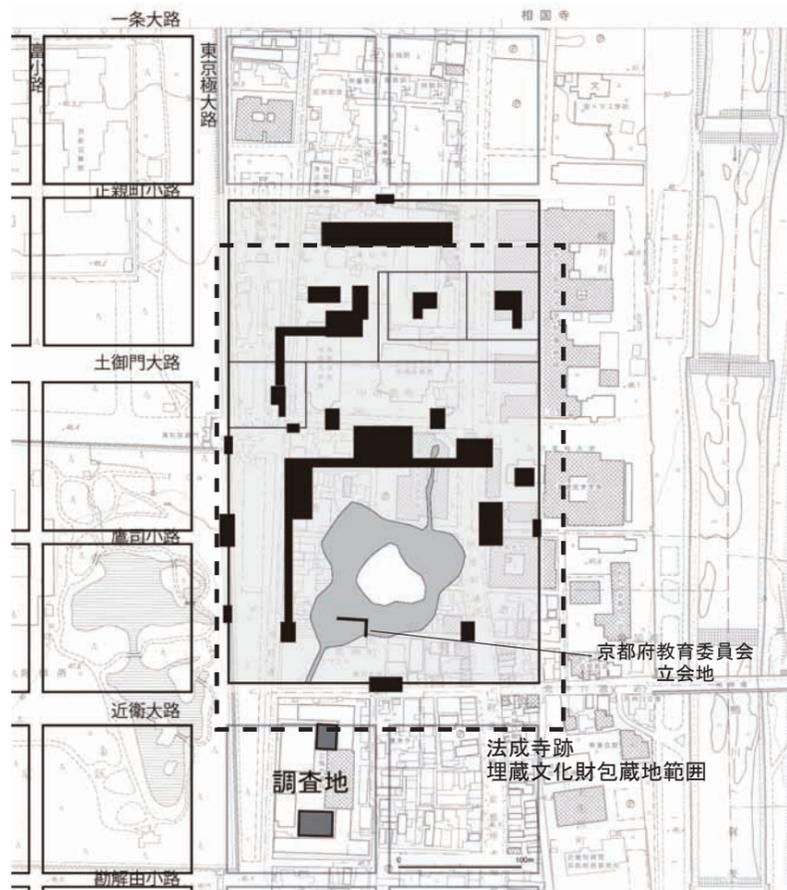
今回の調査では、法成寺跡、寺町旧域でそれぞれ重要な調査成果を得ることができました。

法成寺が創建された時点では、調査地周辺は鴨川の河川敷に位置しており、寺域がここまで及んでいなかったと考えられます。法成寺の主要な部分は荒神口通以北にあったと推定されます。

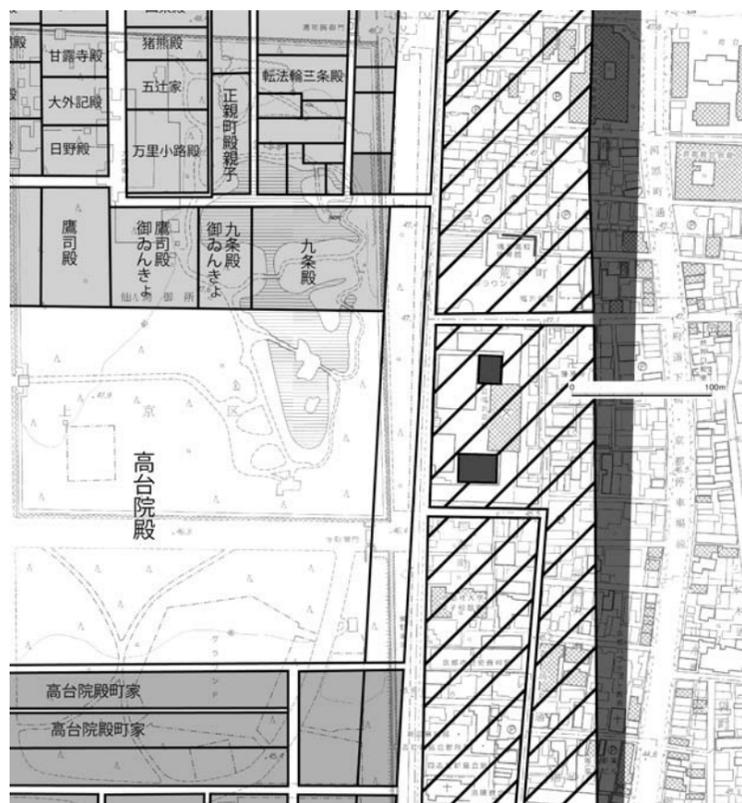
寺町旧域については、秀吉が寺院の再編を行いました。個別の寺院の実態についてはよく分かっていませんでした。今回の調査では、寺院に関する礎石建物や溝などの遺構を検出しました。絵図などに残された寺院との関係も含め、今後、中世末期から近世の京の実態に迫り得る成果と言えるでしょう。

この後、何度かの大火を経て、寺町は武家屋敷や公家屋敷へと変わりました。明治33(1900)年に京都府高等女学校が現校地に移転し、昭和23(1948)年には京都府立鴨沂高等学校と改称され現在に至っています。

このように、当調査地では平安時代からの様々な歴史的な事象が埋もれていることが判明しました。



法成寺復原図 (1023年当時)
杉山信三「藤原氏の氏寺とその院家」より



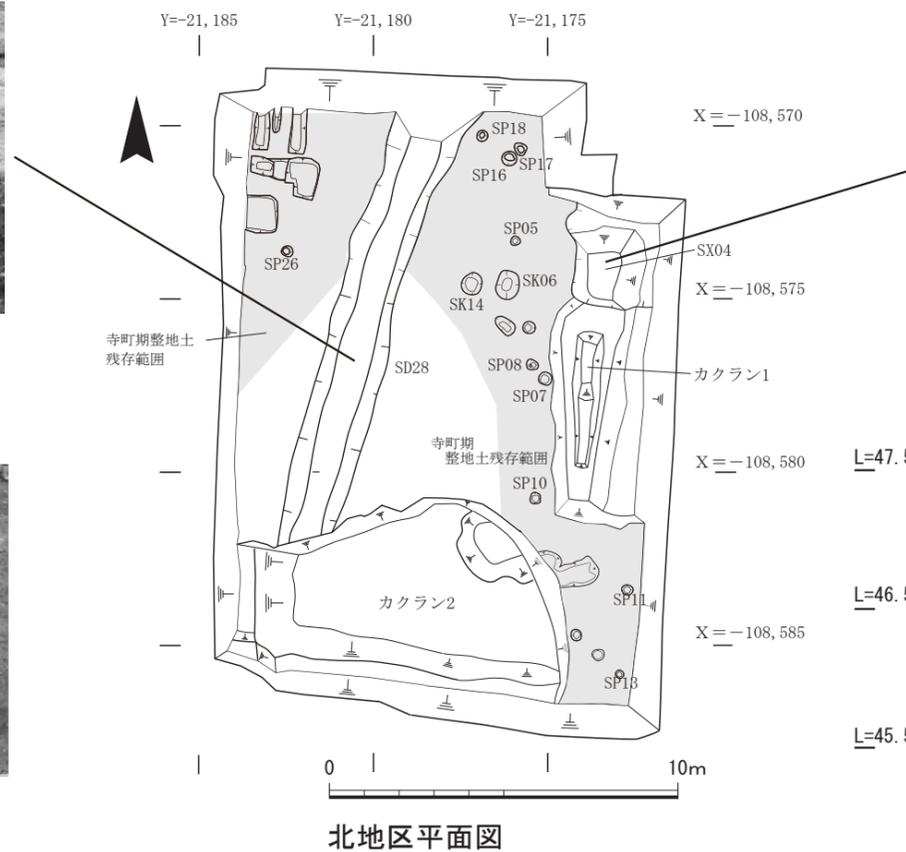
寺町区画と御土居の復原 (1590年頃)



溝SD28 (南から)



礎石建物 (西から)

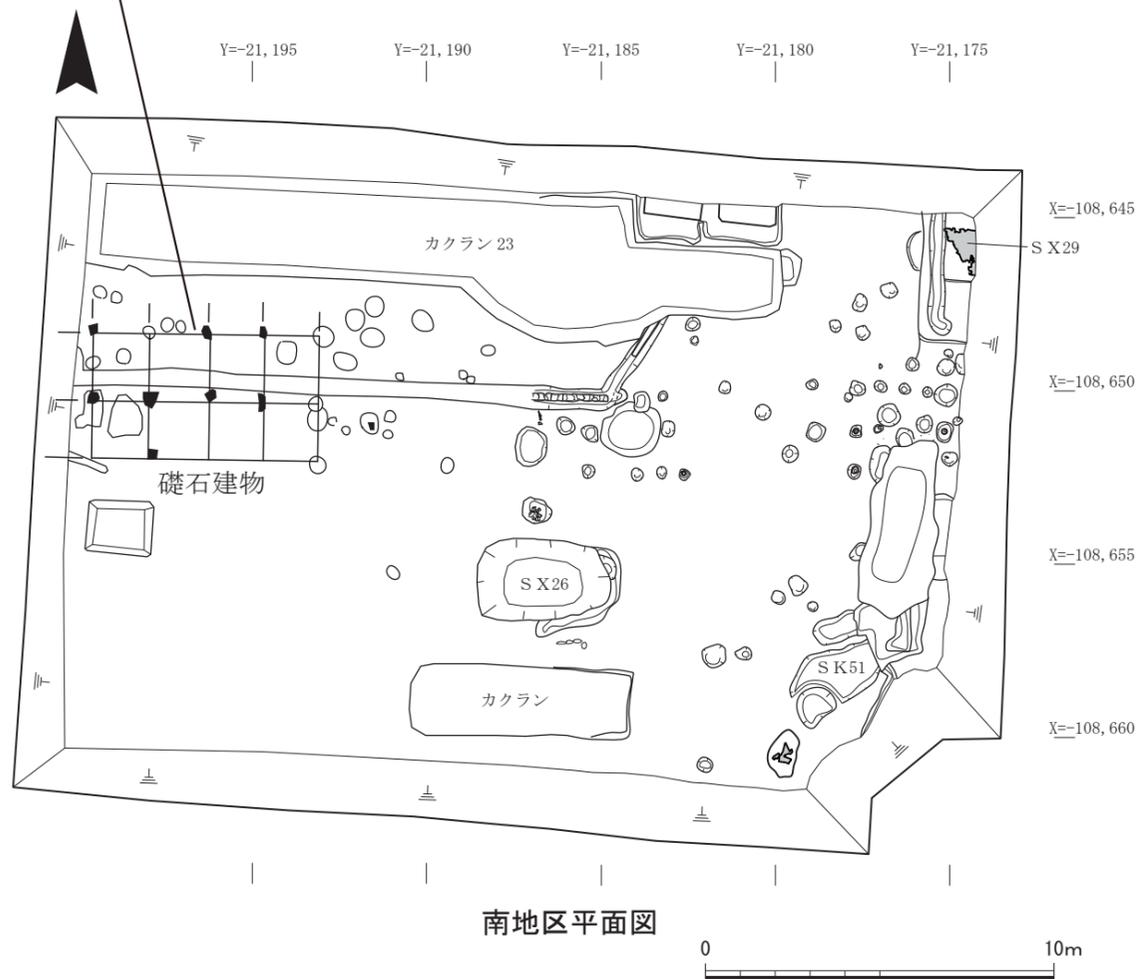
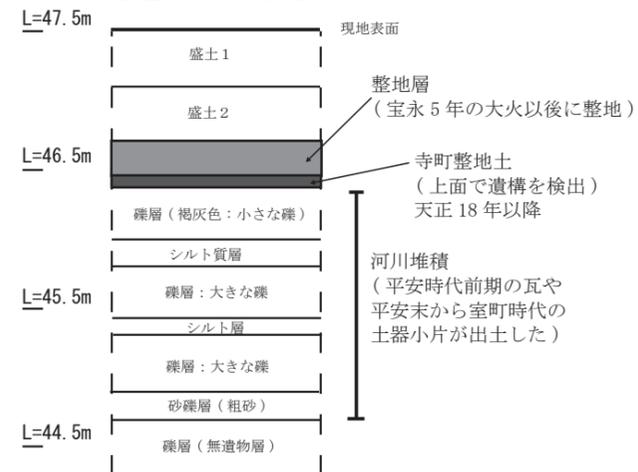


北地区平面図



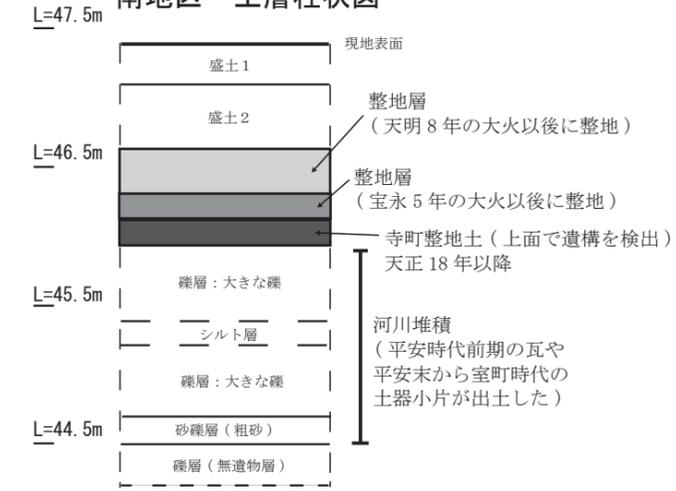
宝永5年の大火で焼けた瓦を捨てた穴 (南西から)

北地区 土層柱状図



南地区平面図

南地区 土層柱状図



鴨沂高校1年生発掘体験 7月12日